

置かれた場所で・・・咲く？

リレーコラム 26

キャリアの積み方-私の場合

国立病院機構三重病院 臨床研究部

アレルギー疾患治療開発研究室長

長尾みづほ

私は、今勤務する国立病院機構三重病院にきて 13 年目になりました。目の前のことを何とかしなきゃとの思いで、私なりにがんばって？きて、あつという間に今になったという感じです。

お世話になったはじめの頃は、一人娘がまだ 1 歳でしたので夜中の呼び出しや重症児の主治医などは物理的に難しいこともあり、非常勤医師として、平日の日中にできることだけをしていました。このときは、ありがたいと思う反面、自分が小児科医として一人前に働けていないという焦り、常勤でないことの悔しさなどちょっと複雑な心境でした。でも、こんな時期を過ごしたおかげで、それぞれ人には子育て、介護、自分の健康などいろんな状況があるけれど、お互いの立場を思いやって働くことの大切さと、多様な働き方があっていいのだと理解できた気がします。

私は小児アレルギーをサブスペシャリティーにしていますが、このような common disease では臨床データを丁寧に拾ってまとめていくことがポイントと思っています。データをきちんと整理して集計するとルーチン診療だけでは見逃しがちな新しい視点や臨床課題の解決の糸口がみえてきます（自慢ではありませんが、上司にはデータ「打ち出の小槌」などとからかわれています。大量の雑多に見えるデータをこつこつ掘り起こしていくと自分でも驚くほどに面白いものがでてくるのです）。そういった作業には周囲の協力が欠かせません。小児科医はもちろんですが、看護師、臨床心理士、栄養士、検査技師、事務などコ・メディカルも一緒に取り組んでくださるので楽しく働くことができます。

また、私の専門分野は女性も多く、研究会や多施設共同臨床研究などを通して他の病院の女性の先生方と接しますが、それぞれのちょっとした苦労とそれによって得られる達成感を共有することも励みです。全国学会では託児室があり、娘が就学前のときには随分お世話になりました。娘もそこでお友だちをつくって、「〇〇ちゃんと前も一緒に遊んだよ。」という後で話してくれました。こどもまで全国ネットワーク！、とても感謝です。

ネットワークのついでですが、娘も中学生になりましたので、最近はインターネットを介しての家庭教師なるものも利用させていただいています。塾の送り迎えも先生にお茶を出す必要もなく、私がいなくても娘は簡単に接続して勉強を教えてもらっていますので、ありがたい限りです。

そんなことで、仕事と家庭を両立させている、とお褒めの言葉をいただくことがあるのですが、正直なところ、両親の助けと、私の帰りが遅くなっても嫌み一つ言わない主人、いつも手伝ってくれる娘に甘えている状況ですので、あまり威張れたものではありません。キャリア形成などと格好のいいものでもありません。置かれた環境の中で「咲く」というより、与えられたことを必死でこなしているだけの存在で、確固たるライフプランで颯爽と進んでいる（みえる）先生たちがうらやましいな、と思うこともありました。しかし、よくよく振り返ってみると、日々の臨床データから日常の小さなクリニカルクエスチョンを形にして考えるのは自分にとってとても楽しい作業で、これが私の原動力になっているのだとわかりました。おかげで、最近はインパクトファクターの高い雑誌に論文が載るなど、少しずつ形にしていくこともできてきて、結局自分で生き方は選んでいるのだ、とやっと気がつき始めた今日この頃です。

★ 著者略歴 ★

ながお
長尾みづほ

1997年岐阜大学医学部卒業

同年岐阜大学小児科に入局し2002年に大学院を卒業。

小児科専門医、アレルギー学会専門医、医学博士を花嫁道具に、出身地でもある三重県の人と結婚して岐阜から転居。偶然今の藤澤院長に研究会で出会ったことから三重病院で勤務することになり、現在に至る。

男女共同参画推進委員会より

女性医師にかかった方が長生きするというデータがあります。米国でメディケアに加入している65歳以上の高齢者で心疾患やCOPDなどの内科疾患で緊急入院した130万人の患者について担当医の性別で比較すると死亡率、再入院率ともに女性医師の患者のほうが低かったのです。これはハーバード公衆衛生大学院の津川友介氏らが2017年に発表して大きな反響を呼びました(JAMA Intern Med. 2017;177(2):206-213)。女性医師のほうが軽症患者を診ているわけではなく、患者の持病や医師の年齢などの属性や入院施設などの様々な条件を補正して比較した結果です。この結果の理由について津川氏はインタビュー記事の中で、女性医師のほうが診療ガイドラインの遵守、エビデンスに沿った治療、患者との良好なコミュニケーション、専門外のことは他の専門医に相談、より詳しい検査を行い慎重に診療を進めるなどを行っているからではないかと述べています。
